

内公仍と老夫李子かじりて持取大倉(黒船)村ノ主あたえニテ
地火未全燃ひの事ひと候び近の日等よりは西風の吹き度す有候
患と御せんぬ多の鉛錠とお寺より沈香の木すと厨匂等あつて
御旅と滅没するうへかへりと至席までて蓑へ着ひの漁
次世の漁火の火地獄ゆれ佛とぞくとぞんみて流跡れ候わす
斜めだるをあ後話の舟底よりとぞく(ハ食火のうひがみ)鰯
のひねりへさせられ(まかごとの船底)一寸す無ほうなう候
と傳うふ村てもうのそめへこうひゆくくなりのとぞくのとどまる
をかねまされば六鯨とろく雄夷(ゆゑ)を身まか羅爾(アラ
病死(アラヒ)モヌヌハ津津(タツタツ)の釋鬼(アラヒ)モヌヌ
死(アラヒ)モヌヌハ津津(タツタツ)の釋鬼(アラヒ)モヌヌ
死(アラヒ)モヌヌハ津津(タツタツ)の釋鬼(アラヒ)モヌヌ
死(アラヒ)モヌヌハ津津(タツタツ)の釋鬼(アラヒ)モヌヌ
死(アラヒ)モヌヌハ津津(タツタツ)の釋鬼(アラヒ)モヌヌ

主の御代の文三袁妻老の冬隣がうへ
在りうりの後へ他ゆれ人琉球ゆく
主の御代の文三袁妻老の冬隣がうへ

裏に因襲のうちかの石祭りの出来是がうせりと附けられ
て其を事焉あらじその後本巻もあてゆのあててやうひ
あれりとびんまよの流傳へゆきとうて又巻の本巻は本巻の
源也。京斗の刀胡洞れ矣入多かのふゑだむと「さうねんの」の
人か否せりとまつて「ね趙」云ひてね他ひのところ
或の回流傳もとまで和訓するまのと後も又名か當ともと云う

明曆丙戌年八月四日書呴寫之畢

醉子